



▲子どもたちに指導をする保存会の皆さん（写真右）

「ベンベンベン」と力強い三味線の音が体育館に鳴り響きます。その音色よりもさらに力強い声で「とさんの名は」と子どもたちが語り始めます。舞台では、子どもたちが大きな人形を動かしています。子どもたちには人形浄瑠璃の指導をしているのは「勝浦人形浄瑠璃保存会」の皆さんです。

子どもたち一人一人が練習に

勝浦人形浄瑠璃の練習に取り組む子どもたち

昨年のある日、勝浦小学校の3、4年生が人形浄瑠璃の練習をするということで、見学に行きました。



▲人形浄瑠璃の公演が行われていた年毛神社の境内

勝浦人形浄瑠璃保存会会長の満木由紀夫さんによると、人形浄瑠璃は江戸時代の終わり頃に関西から勝浦に伝わったと考えられているそうです。勝浦にある空閑神社や年毛神社の境内などで披露され、明治時代に入ると地域の娯楽として活発に上演

勝浦人形浄瑠璃の歴史

打ち込む姿は大人顔負けで「この迫力はすごい」と思いました。では、そもそも勝浦人形浄瑠璃とはどんな伝統芸能なのか、そしてなぜ勝浦小学校で行われているのか、調べてみることにしました。

このまま時代の流れの中に埋もれてしまいうような勝浦人形浄瑠璃でしたが、復活の発端となる出来事が起こりました。平成14年に勝浦小学校の4年生が社会科の学習で、紙粘土で作った人形と、先生のオルガン演奏による人形浄瑠璃を行ったのです。芝居を見た地域の大人たちは大いに驚きました。そして、子どもたちの取り組みに触発された人々から「勝浦人形浄瑠璃を復活させよう」との声が上がるようになりました。時を同じくして、日本の人形浄瑠璃がユネスコの無形文化遺産にリスト入りしたことも、復

地域の力で復活した勝浦人形浄瑠璃

されるようになり、明治の終わりから大正にかけて最盛期を迎えました。大正には、当時の国鉄東郷駅の開通祝いや、近隣の集落の大漁祈願に招かれるなど、娯楽として浸透していたそうです。しかし、昭和に入り、新しい娯楽の登場や戦争の影響で徐々に衰退していききました。そして、第二次世界大戦の後には、勝浦で人形浄瑠璃が上演されることはなくなりました。

活の熱意を後押ししました。熱意はあるけれども人形がない、経験もないという中での出発でしたが、素晴らしい指導者の協力や当時の津屋崎町の支援を得ることができました。さまざまな人たちの協力で、平成16年に「勝浦人形浄瑠璃保存会」が発足しました。子どもたちの取り組みをきっかけに地域の人たちが自分たちの力で、地域の伝統を復活させたのです。



▲人形は子どもたち3人掛かりで操作します

街角記者が行く

～広報ボランティアの取材報告～



ご存じですか？ 地域の宝

勝浦人形浄瑠璃

皆さんは福津の伝統芸能として、人形浄瑠璃が引き継がれていることを知っていますか。今回は、郷土の伝統芸能である勝浦人形浄瑠璃の継承に取り組む勝浦小学校の子どもたちと、地域の人たちの取り組みを取材しました。



勝浦人形浄瑠璃

福津市立勝浦小学校

▲人形浄瑠璃を演じる勝浦小学校の子どもたち



街角記者

ながまつ しゅんいち
永松 春一

郷土の歴史に深い興味があり、福津市観光ボランティアガイドとして、福津の魅力をお届けしています。

「街角記者が行く」とは、広報ボランティアが読者の皆さんを代表して記者となり、街角に出て、市や関連団体の取り組みを取材するコーナーです。記者の目線で、時には歯に衣着せぬ物言いで関係者を取材し、皆さんの疑問に答えていきます。

勝浦人形浄瑠璃を体験してみました

勝浦人形浄瑠璃保存会では、福津の伝統芸能である勝浦人形浄瑠璃に親しんでもらうために、定期的に体験会を開催しています。私も昨年の11月に開催された体験会に参加してみました。普段、なかなか接することのない人形浄瑠璃の世界を体験する貴重な機会を得ることができました。興味のある人はぜひ参加してみたいのがでしょうか。

問い合わせ 勝浦人形浄瑠璃保存会（カメリアホール内）☎52・3321



▲人形浄瑠璃の歴史を語る竹本鳴子太夫。竹本さんは九州唯一の浄瑠璃指導者で、保存会の皆さんに技術指導を行っています



▲会場には体験会で使用するさまざまな人形が展示されていました。勝浦小学校の子どもたちが使っていたものもありました



▲からくり人形の仕組みについて説明する保存会会長の満木さん



▲実際に人形を操作してみると、とても重たくて驚きました



▲三味線の体験もできました



▲人形浄瑠璃を演じる保存会の皆さん



▲保存会の皆さんの演技に合わせて太夫を体験しました

勝浦人形浄瑠璃を
多くの人に知ってほしい

私はこの取材を通じて、勝浦小学校の3、4年生や指導に携わる勝浦人形浄瑠璃保存会の皆さん、小学校の先生たちの「地域の宝を後世に残していきたい

い」という強い思いに触れました。そして、その熱い思いに私は圧倒され続けました。

勝浦は神功皇后が上陸したと伝えられている歴史ある地域です。その地に立つ勝浦小学校は、入学特別認可制度によって、勝浦だけでなく、市内全域から子

どもたちが通学できます。さまざまな地域から集まった子どもたちが力を合わせて、人形浄瑠璃の技を引き継ぎ、更に磨こうとしている。そして、それを支える大人たち。市民の力で伝統を継承していくこの取り組みはとても素晴らしいと思います。

福津の大切な伝統芸能である勝浦人形浄瑠璃を見たことがある人はどのくらいいるでしょうか。多くの人たちの地域の宝に対する思いが詰まった勝浦人形浄瑠璃。観劇の機会があれば、ぜひ見てほしいと思います。きっと感動しますよ。



▲子どもたちの練習を見守る藤野先生（写真右）

感動を呼ぶ
子どもたちの演技

「子どもたちの練習の成果をぜひ見てみたい」と思い、10月27日、マル勝まつりに行ってみました。当日は、保護者や地域の人たちで大変にぎわっていました。

練習に臨む子どもたちの真剣な眼差しに保存会の皆さんの指導にも熱が入ります。私が見学した2時間の練習もあつという間に過ぎていきました。

限られた時間を有効に活用しているそうです。藤野先生は「子どもたちは、最初は難しいと感じていても、練習を通じて、人形浄瑠璃の魅力が分かってくる」と『面白い』と感じ『もっと上手になりたい』と思うようになってくるようだ』と話してくれました。3、4年生と一緒に取組むことで、前年度に人形浄瑠璃を学んだ4年生が3年生に技を継承していくという流れが出来上がっていることも、効率的な練習につながっているのかもしれない。

3、4年生の出番がきました。保存会や小学校の先生など、周りの大人に支えてもらいながら、力を合わせて練習に打ち込んできた成果を披露するときです。語り手の太夫と三味線を担当する袴を着た子どもたち、人形を操る人形遣いの子どもたちが会場にやってきました。子どもたちの姿を見ると、体育館がまるで劇場に変わったようでした。

今回、子どもたちが演じた物語は「傾城阿波鳴門巡礼歌の段」というもので、母と娘の情愛を描いた物語です。太夫の語りと三味線の響き、そして人形の所作が重なり合い、観客を物語に引き込んでいきます。三者のびったり息の合った演技は、涙を誘います。子どもたちの人形浄瑠璃に対する熱い思いを読者の皆さんに伝えたいと思い、夢中でシャッターを切りました。子どもたちがこれまで取り組んできた練習の成果がしっかりと発揮され、30分ほどの発表が無事に終了すると、会場は大きな拍手に包まれました。



①体育館には多くの人がやってきました
②大きな人形を操作する人形遣いの子どもたち
③太夫と三味線を担当する子どもたち

後世に伝えたい
「地域の宝」

限られた時間でも
もっとうまくなれるように

街角記者が行く

～広報ボランティアの取材報告～

Vol.14